

# 韓信故里からみた楚の東漸

——江蘇淮安市運河村一号戰国墓の検証を中心に——

太田 麻衣子

【要約】 江蘇省淮安市から出土した運河村墓は戦国中後期の境に造営された楚国の墓とされ、楚が前四世紀末には邗溝以東まで支配を拡大していた証左とされた。しかし本稿では同墓が土着の習俗を保持した楚墓とは異なる墓であることを指摘し、江東の情勢と比較することで、淮安に楚の実効支配が及んだのは戦国後期以降だったことを明示した。つまり戦国中期には楚が淮河・長江両下流域をも支配するようになっていたとする従来の認識は誤っており、春秋戦国に江漢地区で栄えた楚と秦末漢初に江淮地区で興った楚とを単純に同一視することはできないのである。秦末に楚の勢力として挙兵した人々のなかには戦国時代に楚の支配を短期間しか受けていない地域の人々も少なくなかったものであり、淮安出身の韓信もその一人だった。彼らが楚のもとに結集した一要因としては楚文化の共有が指摘でき、今後は漢帝国の成立に楚文化が果たした役割について考えていく必要がある。

史林 第九八巻二号 二〇一五年三月

## はじめに

漢の樹立に大きく貢献した三傑の一人、韓信は、当時の淮陰、現在でいう江蘇省淮安市の出身である。淮安にはそこが韓信故里であることを伝える碑や股くぐりの舞台とされる胯下橋、彼を祀る韓侯祠などもあるが、それらはいずれもひっそりとしていて、あまり盛大にはアピールされていない。郷里出身の英雄としては周恩来のほうが有名であるし、何より

ここは南船北馬の分岐点、輻楫交替の地として、古くから運河随一の要衝として知られてきた地だからである。

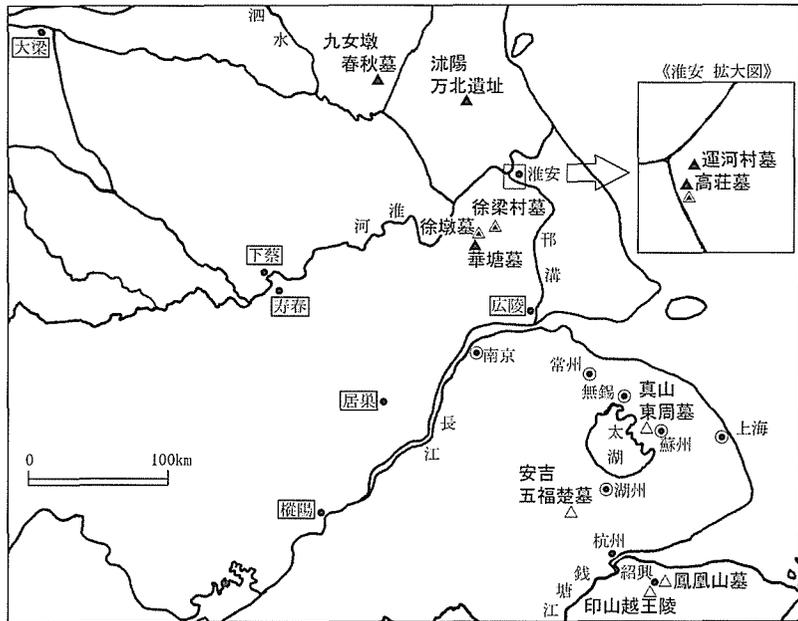
淮安は中国を南北に分ける淮河と縦断する大運河の交差点に位置し、明清には漕運総督も駐在していたが、この地が運河の要衝として機能してきた歴史は古く、記録上は前四八六年に呉が長江と淮河を結ぶ邗溝を開鑿したのが淮安に運河が引かれた始まりとなる。淮安の土着民は淮夷と呼ばれ、淮夷はときに東夷と呼ばれることもあるが、呉と呉を滅ぼした越による邗溝支配はこうした邗溝流域に住まう夷を支配下に収めることで行われたものだった（太田二〇二二）。しかし東夷や淮夷に関する文字資料は現状ほとんどこのことっておらず、戦国期における彼らの動向は杳として知れない。そこで先行研究では次の史料から前四世紀における邗溝およびその周辺の情勢を推測している。

A（楚の懷王）十年 広陵に城く。（『史記』六国年表）

B 楚威王の時に當たり、越北のかた齊を伐つ。……是において越遂に齊を釋て楚を伐つ。楚の威王兵を興して之を伐ち、大いに越を敗り、王無彊を殺し、盡く故吳地の浙江に至るまでを取り、北のかた齊を徐州に破る。而して越此を以て散じ、諸族子争い立ち、或いは王と爲り、或いは君と爲り、江南の海上に濱し、楚に服朝す。（『史記』越王句踐世家）

楚の懷王は威王の子であり、Aにいう懷王十年は西暦でいえば前三一九年にあたる。また『史記』楚世家によれば前三三三年にあたる威王七年に楚が徐州で齊を破っていることから、Bは伝統的に前三三三年ないしその直前の事件とされてきた。しかしBの記述には古くから疑義が呈されており、現在ではこれは、楚が威王期に越を大敗させたことと、懷王期に無彊を殺害したことが混同されたものとみて、無彊の死については前三〇六年に比定する説（楊寛一九四六・一九九一）が有力である。

これらA・Bの記述をもとに、一般に越は前三三三年には楚の侵攻によって広陵以南・以東の沿海地帯にまで退いていたと考えられ、前四世紀後半には楚が淮南のほぼ全域、少なくとも邗溝以西は支配していたとみなされている（何浩一九八九、陳偉一九九二、毛穎・張敏二〇〇五など）。邗溝流域の情勢についてはA・Bから確実にわかることは、前三一九年まで



●…地名（四角内は戦国時代の名称）

▲…戦国中期以前の墓葬

△…戦国後期楚墓

ただし江東に関しては煩瑣を避けるため主な墓葬のみ△で示し、戦国後期楚墓が出土した地名を◎で示した。

図1 淮安を中心とした墓葬の分布図

には楚が邗溝の長江側の入り口にあたる広陵を支配下においていたということだけであり、A・Bをもつて当時すでに楚が邗溝までもを制御していたとするのは、実のところ拡大解釈にすぎないのだが、邗溝の淮河側の入り口である淮安から二〇〇四年に出土した運河村一号戦国墓（以下、運河村墓）の報告書（淮安市博物館編二〇一一）は、考古資料をもつてこうした従来の領域認識を立証しようとしている。それによると、同墓には戦国中期の「越国の墓」とする説と、楚の威王期以降、とくに戦国中期と後期の境目に造営された「楚国の墓」とする説が唱えられているのだが、簡報（淮安市博物館二〇〇九）の段階では楚国の墓だと断定されていたように、報告書もまた同墓には楚墓の特徴が濃厚に現われていることを強調している。そして、それをもとに従来の領域認識を一步進め、楚の威王期には

淮安ふくめ邗溝以東もすでに楚に帰属していたのだとしている。

しかし、報告書が同墓にみられる楚墓の特徴として挙げるものには、首を傾げる点が少なくない。しかも、簡報・報告書ともに触れていないものの、文献には次のような史料もあるのである。

C（魏襄王七年）四月、越王公師隅をして來たりて乗舟・始罔及び舟三百・箭五百萬・犀角・象齒を獻せしめり。（『水経注』河水引

【竹書紀年】（『古本竹書紀年輯証』魏紀一一四）

魏の襄王七年は前三二二二年にあたるが、越から大梁に都を置く魏まで船でいくには淮河を利用する必要があり、そのためにはまず邗溝ないし海上を経由して淮河に入る必要があった（図1）。越はもとより海上から淮河を遡上することも可能な操船技術をもった民族であるから（董楚平一九八八）、広陵が楚に制圧されていることで邗溝が利用できずともこの場合は問題がないが、邗溝からだろうと海上からだろうと、淮河を遡るさいには必ず淮安を通過しなければならないのである（太田二〇〇九）。『史記』楚世家によると同年に楚は秦に大敗したうえ韓・魏連合軍に鄧まで攻めこまれており、越と敵対しているだけでなく秦・韓・魏とも交戦状態にあったが、そうした状況下で越から魏に送られた三百隻もの船をはじめとする軍需物資が淮安を通過できたということは、当時まだそこが楚の支配下には入っていなかったことを示唆している可能性が高い。つまり、楚は前三一九年までには広陵を支配下に収めてはいても、前三二二二年の時点では淮安を支配できてはいなかったのであり、したがって当時はまだ邗溝全域を支配下においていたわけではなかったと考えられるのである。

ただし、Cとして淮安について直接述べた史料ではなく、淮安どころか淮南の情勢を明確に述べた記述もA以外にはみあたらない以上、楚が前四世紀後半には少なくとも邗溝までは支配するようになっていたとする従来の認識もふくめて、文献資料だけでは確かなことは何もいえないというほかにない。こうした資料的制約を打破すべく、かねてよりわたしは出土資料の利用を試みてきており、太田二〇〇九では鄂君啓節という青銅器をもとに従来の領域認識を是正しようとした。鄂君啓節とは前三二二二年に楚の懷王によって作製された交通免税証であり、銘文に示された区域内でこれを提示すれば一

定の輸送量に限り関税が免除されるといふものである。前稿ではこの免税区域を当時の楚の勢力範囲と比較することによって、楚が前三二二年の段階ではまだ東方へは下蔡・居巢・樅陽までにしか安定した支配を確立できておらず、それ以前には越や東夷の居住地ないし彼らに対する前線地帯が広がっていたことを指摘した<sup>②</sup>。その際、運河村墓については簡報の公表前だったため触れることができなかったものの、同墓の南西3kmの地点から出土した淮陰高莊戦国墓（以下、高莊墓）については少しく言及しており、自説の傍証として扱っている。

高莊墓の下葬年代には諸説あり、報告書（淮安市博物館編二〇〇九）や鄭小烜二〇〇七は戦国中期、王厚宇一九九一は戦国前中期、田正標二〇〇九は戦国前期後段とする。ただし、いずれにしても運河村墓に先行する墓葬であることには違わず、運河村墓の簡報や報告書は両墓がともに複数の殉葬者と車馬器をともしなう貴族墓であることから、両墓の差異をもとに淮安の趨勢を讀みとろうとしている。すなわち、運河村墓では高莊墓に大量に副葬されていた越器が大幅に減少しているかわりに楚器の比重は増えているとして、これを淮安が越にかわって楚の支配を受けるようになった証左だとしているのである。しかし、一方で運河村墓の簡報よりわずか一ヶ月はやく公刊されたにすぎない高莊墓の報告書では、両墓は「同一の文化性質」をもつ墓だとされており、そこに差異は見いだされていない。いずれも淮安市博物館が作成した簡報・報告書であるにもかかわらず、運河村墓の位置づけについてこのように齟齬をきたしていることからしてみても、同墓に検討の余地があることは明白である。

そもそも、淮安ふくめ淮河流域や長江下流域といった江淮地区は、東夷や淮夷、呉越の住まう地だった。それに対して楚は春秋戦国と江漢地区に栄えてきたが、秦末漢初にはそれが一変し、江漢地区ではなく江淮地区が「楚」と呼ばれるようになっていく。従来の領域認識では戦国中期には江淮地区もほぼ全域が楚の領域になっていたことなるため、先行研究では春秋戦国の楚と秦末漢初の楚の差異に注意が払われることはなく、両者は無条件に同一視される傾向にあった。しかし太田二〇〇九で指摘したように、楚は戦国後期、前二七八年に秦の侵攻によって江漢地区を失い江淮地区に東遷して

おり、それに附随して起きた様々な変化を抜きにして戦国から秦へと繋がる楚の歴史的連続性を語ることはできないのである。前稿ではそのためにまず領域の観点から東遷以前と以後の楚の差異を明らかにしようと、楚が淮河・長江の両下流域に支配を確立したのは戦国後期、特に前二六二年に即位した考烈王期以降だったことを指摘したが、運河村墓がもし本当に楚国の墓であるならば、この見解は覆されることになる。同墓が従来の領域認識の是非に関わるものである以上、報告書の抱える問題点を見過ごすことは、ただ同墓だけの問題に留まらないのである。

そこで本稿ではまず第一章で運河村墓を楚国の墓とする説を検証するところから議論を始めることにしたい。ただし、報告書が同墓には楚墓の特徴が多く見られるといいつつも、「楚墓」とはわずかに「楚国の墓」と表現しているように、運河村墓が楚墓ではないことは報告書も認めている。楚墓ではない墓からどのようにして楚の支配を窺うのか、報告書はその指標を何も提示してはいないし、そもそも墓葬から支配の程度を探るのは極めて困難である。そこで第二章では邗溝流域とおそらくは連動して楚の支配下に入ったのだろう江東の状況と対照させながら、淮安に及ぼされる楚の支配がいつ実効化したのかを論じることにはしたい。上海や蘇南、浙北といった長江下流域南岸および錢塘江下流域にあたる江東は、楚の支配が実効化する過程を文献からある程度は復原できるため、実効支配の開始と墓葬の変化がどのように対応するかを比較的把握しやすい地域である。こうした江東の事例をもとにすれば、運河村墓造営当時に淮安が楚とどのような関係にあったのか、淮安に楚の実効支配が及んだのはいつだったのかを、より正確に把握することができるだろう。

本稿ではこのように運河村墓の性格を再定義することを通じて、楚の東方支配が実効化していく一過程を明らかにしてみたい。前稿では従来の領域認識を改めることにより、項羽や劉邦に代表される秦末に「楚」の勢力として挙兵した人々のなかには、楚の支配下に組みこまれてから日の浅い者も少なくなかったことを指摘したが、こうした「楚」の一員として項羽と劉邦に比べ、彼らとともに秦末漢初の動乱を動かしていた韓信の故郷がどのような歴史の変遷をたどった地だったのか、それを明らかにすることもまた、春秋戦国の楚とは一線を画す、秦末漢初の楚の一端を解明することに繋がる

だろう。本稿によって前稿での議論を改めて立証し、漢の樹立に「楚」が果たした役割について、再検討することにした。  
い。

① 一般に越の場合は無盟の死が戦国中期と後期の境目とされ、その死亡年については諸説あるものの、近年では前三〇六年とされることが多い。また楚の場合は前三世紀以降ないし白起拔郢の前三七八年以降が戦国後期とされる。運河村墓の報告書は時代区分の詳細な年代を明

記していないが、報告書のいう戦国中後期の境とは、おそらく前三三年から前三〇六年にかけての時期を指しているのだと思われる。  
② 太田二〇〇九では「東夷」を「九夷」と記したが、吉本道雅二〇〇一〇に基づき、本稿では「東夷」に改める。

## 一 運河村墓の検証

はじめに述べたように、運河村墓の報告書は同墓を楚国の墓とする説を強調するが、一方では同墓に淮安の土着文化が強く認められることも指摘しており、被葬者は楚人ではなく楚国属下の淮夷貴族の後裔ないし地方首領だとしている。つまり、被葬者のエスニシティは楚ではないが、楚の支配下にいた人物だから楚国の墓だというのである。では何をもって楚の支配下にいたとしているのかというと、それは同墓には在地の習俗とともに楚墓の特徴が濃厚に現れているからだという。報告書が楚墓の例として挙げるのはもっぱら湖北省江陵県から出土する大型墓ばかりであり、それらと比較したうえで、運河村墓には高荘墓にはなかった楚墓との共通点が多くあるとしているのである。

運河村墓と高荘墓は貴族墓、つまり支配者層の墓であり、だからこそその差異が淮安の趨勢と関連づけられるのだが、厳密にいえば両墓はまったく同じ等級の墓ではなく、運河村墓の被葬者のほうがより高位にあつた人物だと考えられている。というのも、棺槨の重数は運河村墓が四重で高荘墓は二重と運河村墓のほうが多く、車馬器は両墓ともに副葬されていたものの、高荘墓では墓坑の片隅に置かれていただけなのに対して、運河村墓では副槨内にきちんと収められていた。加えて運河村墓には編鐘の台座もあつたことから、もともとは編鐘も副葬されていたのであり、運河村墓のほうが高荘墓より上位に位置づけられる墓であることは明白である。また、両墓ともに盗掘を受けており、とくに運河村墓の被害が甚

大であることには注意が必要である。

（一）簡報・報告書の検討

運河村墓の簡報や報告書が指摘する同墓と楚墓との共通点は、私見によると以下の九点に纏められる。

- ① 封土は版築によってつくられており、三色の層に分かれている。また、墓道は長く傾斜している。
- ② 墓坑には白膏泥<sup>①</sup>が充填され、開口部も白膏泥で封じられている。
- ③ 墓向は東西方向であり、被葬者の頭位は東向きで、仰身直肢である。
- ④ 竹席を用いて納棺している。
- ⑤ 棺槨が四重である。
- ⑥ 編鐘の台座、漆絵木雁ならびに漆器の紋様や金箔を裝飾する技術は楚文化の特徴を有している。
- ⑦ 日用土器には楚墓と同じく楚式鬲を中心とした鬲・罐・豆・鉢の組合があり、鬲だけでなく豆も楚文化の同類器と完全に一致する。

⑧ 残存していた青銅の鼎足は典型的な楚式鼎の特徴をもつ。

⑨ 原始瓷器がなく、印紋硬陶もわずかに残片が出土するのみで、高莊墓にはあつた越文化に特徴的な器物が欠けている。

まず①について、これは高莊墓には封土や墓道がなかったことをふまえた指摘であり、高莊墓の造営時よりも淮安に及ばされる楚の影響力が強まった結果、運河村墓には封土や墓道が築かれたのだとするものである。しかし、高莊墓の報告書自体は同墓に封土や墓道がないのは被葬者の身分が運河村墓よりも低いためだと述べているように、封土や墓道の有無は一概に楚の影響と関連づけられるものではない<sup>②</sup>。しかも、たとえば淮安にほど近い江蘇省邳州市から出土した九女墩春

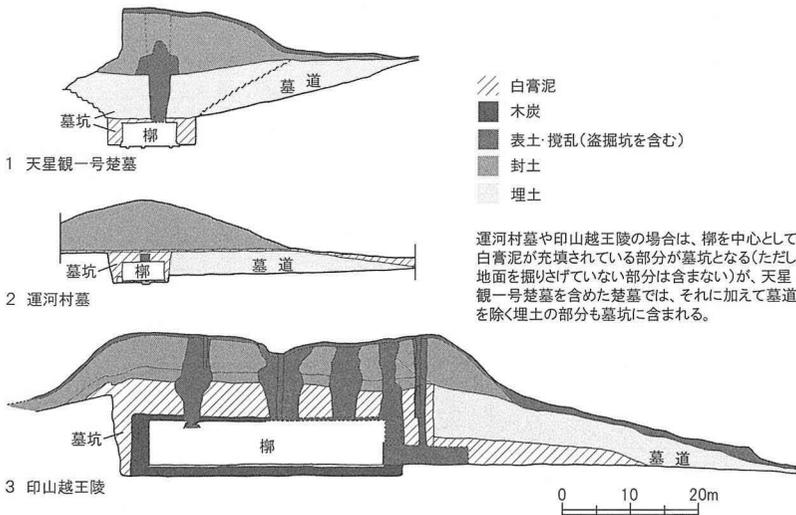


図2 墓葬断面図

秋墓（南京博物院ほか一九九九、孔令遠ほか二〇〇二、徐州博物館ほか二〇〇三。以下、九女墩墓）のように、墓に封土や墓道を築くことは、淮河下流域では春秋時代からすでに行なわれていた。九女墩墓は春秋中後期に比定される徐の貴族墓群とされ、高荘墓ともよく対照されるものだが、<sup>③</sup>そのなかのいくつかの墓には封土や墓道があり、二・三号墩の封土にいたっては運河村墓と同様に種類の異なる土が版築でつき固められて層をなしていたことが確認されている。運河村墓の報告書の図には分層の様子が図示されていないため、その図をトレースした本稿の図2・2にも反映させてはいないが、報告書の記述によれば同墓の封土は黄・白・黒の三色の土が版築でつき固められてそれぞれ層をなしているもので、墓道上の埋土も同じく版築で三色の層に分かれていたという。楚墓のなかにも封土に複数の土が用いられ、それが層をなしているものはあるが、現在までにそうした封土に版築の痕跡は確認されておらず（丁蘭二〇〇六）、運河村墓と楚墓とは封土のつくり方が異なっているのである。

また、墓道についても運河村墓と楚墓とは大きく形態が異なっている。図2・1は運河村墓の報告書が同墓と構造が似ているとする江陵天星観一号楚墓（湖北省荊州地区博物館一九八二）の断

面図だが、これに代表されるように楚墓の墓道は急勾配かつ最奥部が柳蓋より高い位置にあるのが一般的である。それに對して運河村墓の墓道は傾斜角が五度以下という非常に平坦なものであり（図2-1-2）、簡報によれば墓道の最奥部も三層になった柳の底板をあわせた高さ、つまり棺の底あたりに等しいのである。このような墓道は楚墓よりもむしろ越墓のほうに類例を見いだすことができ、浙江省紹興市から出土した印山越王陵（浙江省文物考古研究所ほか二〇〇二）の墓道もまた運河村墓のように長く平坦で、最奥部も棺の底部とほぼ同じ高さに位置している（図2-1-3）。印山越王陵は越王允常の墓ともされる春秋後期の越墓であり、墓道の入り口側の部分が山の傾斜にそって墓坑側ではなく入り口側に五〜六度ほど傾いているという特異な面はあるものの、封土が版築でつくられ、種類の異なる土で層をなしている点、また運河村墓と同様に自然の丘陵を利用してつくられている点からしてみても、楚墓よりはるかに運河村墓に近いといえる<sup>④</sup>。

②についても、確かに墓に白膏泥を用いるのは楚墓の特徴ではあるものの、楚墓では柳の周囲を白膏泥で密閉するだけで、その後は埋土を使つて墓坑内を塞ぐのに対し、運河村墓では墓坑内すべてに白膏泥が充填されており、さらには墓坑の上や墓道上の埋土までもがこれで覆われているのである（図2斜線部）。このように運河村墓における白膏泥の用法は楚墓とは異なっているのだが、それに加えて墓に白膏泥を用いること自体すでに春秋時代には浙江・山東地区にまで伝播しており、九女墩墓や高荘墓でも柳の周囲には白膏泥が用いられていた。しかも印山越王陵では柳がまず木炭で覆われており、墓道もまず下半が白膏泥で埋められた後に黄色い五花土を埋土として全体が埋められているように、運河村墓とは異なる点もありはするものの、白膏泥が墓坑の上に覆いかぶさるほど墓坑内に充填されている点は同じであり、運河村墓は白膏泥の用法においても楚墓よりはむしろ越墓に近いといえる。

③にいう東向きの墓向や頭位、仰身直肢という点についても、確かに戦国期の大型楚墓でも被葬者の頭は墓の向きと同じく東を向いていることが多く、かつ仰向けで足をのばした状態で葬られているが、本章第二節で述べるように、淮安一帶から出土する殷墓や春秋墓にも仰身直肢や東向きの頭位は確認できるため、それをわざわざ楚墓由来のものとすること

は不可能である。

④にいう竹蓆を用いて納棺しているという点についても、運河村墓から発見された竹蓆は副葬品や犠牲をくるんでいたものと副槨の底に敷かれていたものだけで、楚墓のように竹蓆で槨蓋を覆うという特殊な用法が行われていた形跡は確認されていない。

⑤にいう四重の棺槨については、確かに大型の楚墓には棺槨が三重や四重になっているものがあるため、多重という点においては運河村墓の棺槨は楚墓に類似するといえる。ただしその形態は大きく異なっており、戦国期の楚墓では一般に直方体の槨が用いられるのに対して、運河村墓では直方体の主槨の横に底面が正方形に近い直方体の副槨が附属しており、全体としてし字型になっている。また、棺も楚墓では懸底弧棺や懸底方棺、長方盒形棺が用いられるのに対し、運河村墓ではそれらとはまったく異なる構造をした独木棺が用いられているのである。ちなみに独木棺は越墓でもよく使用され、印山越王陵にも用いられているが、同墓の槨は三角柱を横にした特殊な形態をしており、いくら共通点が多いとはいっても、運河村墓とはやはり異質な墓である点には注意しておきたい。<sup>⑧</sup>

このように①～⑤はいずれも外的な指摘であり、運河村墓は越墓以上に楚墓とは異質な構造をした墓だといえる。では⑥以降に纏めた副葬品はどうかという点と、まず戦国時代に楚で漆器が盛行していたことは確かであり、特に動物を模した漆器は楚以外の地域ではあまりみられないことから（佐藤武敏一九八五）、運河村墓から出土した漆絵木雁が楚系の副葬品である可能性は極めて高いといえる。<sup>⑨</sup>金箔については具体的にどのようなものだったのがわからないため、楚文化と関わりのあるものなのか否かを判断することができないのだが、出土位置からして馬車の装飾だったのではないかと考えられる。運河村墓に副葬されていた車馬器は報告書によれば高荘墓のものと同く似ており、特に甬は楚でも越でもなく蘇北地区に伝統的な形態をしているという。

⑦にいう楚式鬲を中心とした鬲・罐・豆・孟ないし鉢といった組合が楚墓にみられる典型的な日用土器の組合せである



図3 運河村墓出土の鬲と豆

ことは、郭徳維一九九五によってすでに指摘されていることである（図3）。ただし、その一方で氏は、鬲・罐・豆・盃・鉢が楚に限らず幅広い地域で日常的に最もよく使われる土器であることも述べている。つまり、楚式鬲という製作方法や構造、使用時期、用途など、様々な点で他文化の鬲とは異なる楚文化に特徴的な鬲の存在こそが、この組合を楚墓の特徴たらしめているといえるのだが、九女墩墓からも楚式鬲が出土しているように、楚式鬲は春秋末期にはすでに淮河下流域にまで傳播してきていた<sup>⑩</sup>。しかも九女墩六号墓からは楚式鬲だけでなく罐や豆、鉢も出土していることから、運河村墓の楚式鬲やそれを中心とした鬲・罐・豆・鉢という組合が、楚から直接伝わってきたものなのか、それとも九女墩のような中継地から間接的に伝わってきたものなのかは定かでない。加えて運河村墓出土の罐は報告書によれば淮安の殷周遺跡から出土する罐系土器と同系統のものであり、楚墓に典型的な組合だからといって、各構成要素がすべて楚系というわけでもないのである。

ちなみに運河村墓の報告書は同墓出土の豆が楚系の形態をしていることを指摘しつつも、一方では同墓を越国の墓とする論者の意見として、豆や杯などの黒陶器は越地のものに類似するとも述べている。ただし、その例証として挙げられた紹興の鳳凰山木椁墓（紹興県文物管理委员会一九七六。以下、鳳凰山墓）の黒陶豆は高さが一一・二cmしかない短足の豆で、運河村墓から出土した豆はいずれも二二～二四cmと長足である。運河村墓の豆のように脚部が細長く盤が浅い豆は楚墓からは多く出土するが、越墓からは一般に短足の豆が出土しており、運河村墓の豆は、黒陶という材質はともかく、器形のうえでは楚系のものともみらるべきである<sup>⑪</sup>。

⑧にいう鼎足（図4-2）も楚系のものともみてよいが、運河村墓の簡報はするように判断しているにもかかわらず、報

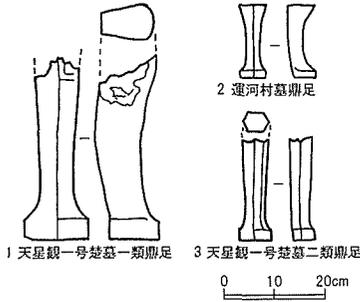


図4 鼎 足

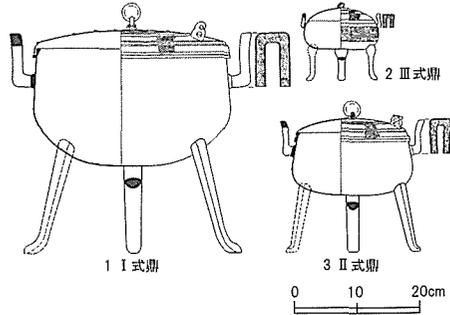


図5 高荘墓出土の青銅鼎

⑨にいう原始瓷器とは後漢に出現する「成熟青瓷」の前段階にある施釉陶器のことであり、古くは中原地区でも生産されていたものの、戦国時代には越地でしか生産されなくなっていたものである。高度な製作技術に加えて釉薬によってツヤをおびた芸術性の高さから、日用器としてのみならず礼樂器としても盛んに用いられた<sup>⑮</sup>が、越地でこのように原始瓷器が盛行した背景には硬陶の発展が不可欠であり、器表面全体にスタンプで印文を施した印紋硬陶もまた越文化に特徴的な器物であった。印紋硬陶の焼成には一一〇〇度、原始瓷器には一二〇〇度の高温が必要であり、両者を一緒に焼いていた窯も珍しくはないのだが、春秋戦国期に原始瓷器を生産していた窯は現在明らかな範囲では杭州湾附近と限定的で、官営による生産が行われて

告書はその点には触れず、ただ同墓を越国の墓とする論者の意見として、高荘墓のⅢ式鼎(図5・2)との類似を指摘するのみである。高荘墓から出土した鼎は三種類に分けられており、細長く外反した越式鼎の脚をもつⅠ・Ⅱ式鼎(図5・1・3)に比べて、直線的な脚をもつⅢ式鼎は楚式鼎に近いとされるが、それでも運河村墓の鼎足と比べれば明らかに華奢であるように、越式鼎の要素もなお保持している。<sup>⑯</sup>一方、たとえば天星観一号楚墓から出土した鼎足は、運河村墓の鼎足が円柱体で前後中央に稜線があるのに対し、内側が平らで外側が丸かったり(図4・1)稜線が六本あったり(図4・3)と差異はあるものの、高荘墓のⅢ式鼎より運河村墓の鼎足に近いことは明白である。したがって運河村墓の鼎足は簡報のいうように楚式鼎のものともみるべきであり、高荘墓のⅢ式鼎に似ているとはいえない。

いた可能性も指摘されている<sup>⑧</sup>。つまり、越地以外で原始瓷器や印紋硬陶が出土した場合、そこには越との何らかの関係性をみいだせるのである<sup>⑦</sup>。したがって高荘墓では全部で三七点確認された土器のうち、原始瓷器が八点、印紋硬陶は一〇点と、約半数がこうした越文化に特徴的な器物であったのに対し、運河村墓からは原始瓷器が出土しておらず、印紋硬陶も全部で二三点ほど出土した土器のうちのわずか二点のみだったというのは<sup>⑨</sup>、いくら運河村墓の盗掘被害がひどいといっても、顕著な差異といえることができる。そのためそこに、高荘墓が造営されてから運河村墓が造営されるまでの間に淮安の情勢が変化した、つまり淮安が越にかわって楚の支配を受けるようになったという背景を描いてしまうのも、無理のないことかとは思われる。

しかし冒頭に挙げたBの記述に明らかのように、運河村墓が造営されたとされる時期に越は楚の大攻勢を受け、王が殺害される事態にまで追いつめられていたのである。そうした状況下で官営にもなっていた窯業が衰退していったことは想像に難くなく、実際に原始瓷器の生産が戦国後期には一旦停止していたことが王屹峰二〇一〇によって確認されている。王氏によると印紋硬陶の場合は戦国後期にもわずかながら生産が継続していたようだが、それでも上海や蘇南地区から出土する戦国後期墓には原始瓷器だけでなく印紋硬陶も副葬されなくなっていく<sup>⑩</sup>（黄宣佩はか一九八二、かわりに典型的な楚墓が造営されるようになっていく。してみれば楚が越を併呑していくにともない原始瓷器や印紋硬陶の生産も衰退していったことは明らかであり、運河村墓における原始瓷器の不在や印紋硬陶の減少もまさにそうした状況に符合しているだけ、必ずしも楚が越にかわって淮安を支配するようになったことを示しているとはまではいえないのである。むしろ、楚が越を滅ぼしつつあるさなかにおいてもなお支配者層の墓である運河村墓に越地でしか生産されない印紋硬陶が副葬されていたことは、当時まだ淮安が越との繋がりを絶ていなかかった証拠として、積極的に評価するべきではなからうか。

以上、本節では運河村墓の簡報や報告書が同墓にみられる楚墓の特徴として主張する点を①から⑨に纏め、それぞれ検証してみたが、墓の構造や埋葬方法にかんする①から⑤の指摘はむしろ楚墓との差異を示しており、運河村墓は構造の面

では楚墓とは異質の墓であることが判明した。また、⑥から⑨に纏めた副葬品については、鼎足の変化に示されるように、確かに高莊墓より楚の影響力が強まっている観はあるものの、かといって淮安が越と手を切り楚の支配を受けるようになったことを証明するほどのものではなかった。したがって①から⑨を理由に運河村墓を楚国の墓とすることはできないのであり、同墓の性格については改めて議論しなおす必要がある。以下、節を改めて検討することにした。

## (二) 運河村墓の性格

運河村墓の報告書は、同墓には楚墓の特徴が濃厚に現われているとする一方で、淮安に隣接する江蘇省宿遷市から出土した沭陽万北遺址の殷周墓(谷建祥ほか一九八八、中国考古学会編一九八九)や淮安治下の盱眙県花塘鎮華塘村から出土した春秋墓(淮安市博物館編二〇一一。以下、華塘墓)、そして高莊墓との対比から、運河村墓には「淮夷古来の土着文化」が保持されていることも指摘している。だからこそ被葬者は楚人ではなく楚国属下の淮夷貴族の後裔ないしは地方首領だと判断しているのだが、ひとまず同墓にみられる在地の習俗として指摘された点を箇条書きにしてみると、

⑩ 殉狗腰坑がある。

⑪ 頭位は東である。

⑫ 墓坑内の北側に棺、南側に副葬品が置かれている。

⑬ 人間が殉葬されている。

⑭ 墓坑の南西角にウシ・ヒツジ・ブタの三牲が殉葬されている。

となる。万北遺址は⑩⑪に、華塘墓は⑪⑫に、高莊墓は⑩⑬⑭のほぼすべてに合致しており、報告書は言及していないものの、万北遺址や高莊墓、運河村墓には仰身直肢という共通点もみいだせる。⑭<sup>⑩</sup>の高莊墓と運河村墓とで唯一明確に異なるのは、高莊墓からは三牲のうちウシの骨しか出土しなかったという点だけだが、これについては身分差によるものという可



1 運河村墓出土黒陶杯



2 西施山遺址出土黒陶杯



3 紹興県平水鎮中灶出土印紋硬陶把罐

図6 黒陶杯と印紋硬陶把罐

能性も考えられる。また、高荘墓の主棺には人骨がのこっていないなかったため、被葬者の頭位についても正確には不明なのだが、棺槨は東西向きに置かれており、高荘墓の報告書は墓向も頭位も東向きだったとみている。

このように運河村墓と高荘墓に見られる習俗には大きな違いがなく、その点では確かに高荘墓の報告書がいうとおり両墓は「同一の文化性質」をもつ墓だといえる。しかし、副葬品については前節でみてきたように、運河村墓は高荘墓に比べて越器の比重が少なく、かわりに楚器の存在感が増しているという差異がある<sup>22)</sup>。無論、両墓が盗掘されている以上、そこから出土した副葬品の多寡を単純に比較しても意味はないのだが、王厚宇一九九一によると、高荘墓の場合は発掘当時の状況や盗掘坑の位置からして、墓坑南部に置いてあった青銅器群は盗掘被害に遭っておらず、その青銅器の器種や組合、個数は楚墓とは異なり越墓に通じる特徴をもっていたという<sup>23)</sup>。対して盗掘被害の甚大だった運河村墓からはそれでもなお楚式鬲や漆絵木雁といった楚文化に特徴的な器物が出土しており、鼎足の変化からしてみても、確かに副葬品には高荘墓より楚文化の影響を強く受けているのである<sup>24)</sup>。

ただしその一方で、前節でも述べたように運河村墓には越地でしか生産されない印紋硬陶も副葬されていた。加えて同墓を越国の墓とする論者や高荘墓の報告書は、同墓出土の黒陶杯が紹興漓渚鎮の戦国墓（浙江省文物管理委员会一九五七）から出土した同類器に類似することを指摘しているのだが、同様の杯は紹興西施山遺址（劉侃二〇〇九）からも出土しており、特徴的な把手の形態は同じく紹興から出土した印紋硬陶把罐ともよく似ている（図6）<sup>25)</sup>。してみれば、印紋硬陶だけでなく黒陶杯もまた運河村墓に越地との関わりがあ

つたことを示しているものであり、同墓が高荘墓と同じ習俗をもつ墓であることとあわせてみても、副葬品に楚の影響が強く現われていることだけをもって、淮安が越にかわつて楚の支配を受けるようになったと判断することはできないのである。

そもそも邗溝を開鑿した呉が春秋末期に越に滅ぼされて以降、邗溝流域に最も強い影響力を及ぼしたのは越だった。しかし、冒頭Bの記述に明らかなように、戦国中期になると越は楚の攻勢によって弱体化し、越王無彊の死によって諸勢力に分裂してしまう。高荘墓が造営されてから運河村墓ができるまでの期間が丁度この時期に相当していることからすれば、副葬品の差異はまさに強勢を誇っていた越が楚に併呑されていくさまを反映しているのであり、そうした状況下でもなお運河村墓に印紋硬陶や黒陶杯といった越地と関わりのある器物が副葬されていたことは、同墓造営当時の淮安がまだ越との繋がりを保持していたことを示唆していよう。

以上の議論を纏めてみると、高荘墓と運河村墓は同じ習俗をもつ貴族墓であり、高荘墓の時点においても運河村墓の時点においても、淮安を直接統治していたのは、楚でも越でもなく淮夷と呼ばれる在地の人々だった。両墓の副葬品には差異があるとはいえ、それは運河村墓の造営時には楚によって越が滅ぼされつつあったからであり、同墓になお越器が副葬されていたこと、また冒頭Cの記述からしてみても、副葬品だけをもって当時の淮安が越にかわつて楚の支配を受けるようになったと判断することはできないのである。運河村墓の性格はあくまで淮安に伝統的な墓葬の範囲内に留まつており、当時の淮安がすでに楚に帰属していたのか、それともまた別の状態にあったのかは、より広い地域・時代の史料も交えながら検討する必要がある。次章ではまず運河村墓以降に淮安の戦国墓がどのように変化していったのかを追い、それを江東の情勢と比較することによって、運河村墓が造営された戦国中後期の境に淮安がどのような状況にあったのかを考察してみたい。

① 白膏泥は色味によって青膏泥や青灰泥ともいうが、本稿では三者が

本質的には同じものであることを明確にすべく、簡報や報告書に青膏

- ② 泥ない青灰泥と記されているものも、便宜的に白膏泥と記す。  
 ② 加えて高荘墓は盜掘被害こそひどくないものの明清時代に起きた黄河氾濫の被害を受けており、発掘時には墓坑の上に厚さ三〇cmの粉砂質粘土層が堆積していただけでなく、開口部も黄褐色の砂質粘土層のなかにすでに開いており、墓坑内には黄褐色の鈎土を含む砂質粘土がつまっていたという（淮陰市博物館一九八八）。そのため同墓には最初から封土がなかったのではなく、黄河の氾濫で封土が溶われてしまった可能性も十分に考えられる。また、墓坑北西角に位置する北西高・東南低に傾斜した土台を墓道とみる論者もいるように（劉和恵一九九五、田正標二〇〇九）、高荘墓に造営当初から封土や墓道がなかったのかは判断としない。
- ③ 高荘墓には徐器が少なからず副葬されており、報告書は被葬者を徐人とみている。ただし『春秋経』昭公三〇年によれば徐は前五二二年に呉に滅ぼされており、高荘墓が淮安に流れついた徐の遺民の墓なのか、それとも楚・越の文化とともに徐文化を摂取した土着民の墓なのかは判断が難しい。王厚宇一九九一のように、いずれにしても淮夷人であるとして、徐人と断定しないほうがよいと考える。
- ④ 越墓のなかにも傾斜した墓道をもつものはあるが、土墩墓の名残か墓坑が浅いため、墓道の勾配も楚墓に比べて緩やかである。
- ⑤ 楚墓と白膏泥の関係については間瀬取芳一九八四を参照。
- ⑥ 浙江出土のものでは印山越王陵のほか戦国前期後段に比定される浙江省湖州市の長興鼻子山一号墓や安吉龍山一四一号墩一号墓（浙江省文物考古研究所編二〇〇九）などにも白膏泥が用いられている。山東出土のものには劉延常ほか二〇〇七を参照。
- ⑦ 大型楚墓でも天星観一号楚墓のように南を向いているものがあるが、大多数は東向きであり、中・小型墓の場合は江陵では南向き、長沙では東向きや北向きが多い（郭徳維一九九五、丁蘭二〇〇六）。
- ⑧ 越墓のなかには直方体の椁をもつものもありはするものの、墓坑外部の左側には必ず副葬品を収めるための副葬坑が設けられており（陳元甫二〇〇九）、その点においても運河村墓とは異なっている。
- ⑨ 同様に鳥を模した彩色の漆器としては、湖北省随州市から出土した曾侯乙墓（湖北省博物館編一九八九）の鴛鴦盒や江陵雨台山楚墓（湖北省荆州市博物館一九八四）の鴛鴦豆などがある。
- ⑩ 楚式鬲については蘇秉琦一九八二、楊権喜一九八七・二〇〇一、郭徳維一九九五を参照。
- ⑪ 楚式鬲は山東省の戦国墓からも出土する（劉延常ほか二〇〇七）。高荘墓の場合は盜掘により土器が荒らされた状況にあつたため、陶鬲がもとから副葬されていなかったのか、それとも盜掘により姿を消してしまったのかはわからないのだが、同じ煮沸器としては上部が甑、下部が鬲に分かれる青銅製の鬲が出土しており、その高部分は楚式鬲の形態をしていた。報告書によれば高荘墓の鬲は楚系のものだが、高部分の口沿には呉系の鬲の特徴である注ぎ口があり、楚系の鬲に呉越の文化要素がとり入れられたものだという。
- ⑫ 鳳凰山墓は第二章第一節で述べるように楚文化の要素を多分にもつ墓でもある。
- ⑬ 高荘墓Ⅰ・Ⅱ式鼎の蓋には等間隔に配置された三つの獸型紐と中央紐があり、間瀬一九八六によるとこれは戦国楚鼎の特徴である。また、鄭小炉二〇〇七によれば原始瓷器の越式鼎には同様の鼎蓋が確認できるものの、青銅製のものでは高荘墓のもの以外に出土例がないという。したがってⅢ式鼎だけでなくⅠ・Ⅱ式鼎もまた楚式鼎と越式鼎の中間に位置する鼎といふべきである。
- ⑭ 原始瓷器については関口一九八五、楊楠二〇〇〇、孟国平二〇〇九、王屹峰二〇一〇を参照。なお原始瓷器は原始青瓷や青瓷、釉陶、灰釉など様々な名称で呼ばれるが、本稿では運河村墓の報告書にしたがい

原始瓷器と称する。

- ⑮ 春秋戦国時代の越墓は貴族墓であっても伝統的に青銅礼器は副葬しない傾向にあり、かわりに原始瓷や硬陶の倣銅礼器が副葬された（陳元甫二〇〇九）。

- ⑯ 董楚平一九九〇は紹興富盛戦国窯址や浙江省杭州市の蕭山進化区古代窯址を越の官営工場とみて、それらに戦国後期の遺物がないのは楚の侵攻と破壊によって突然に生産が中断されたからだとする。ただし王屹峰二〇一〇によれば錢塘江以南に位置するこれらの窯址にはそもそも戦国初期までしか使われていた形跡がなく、それ以降に使われていた窯址はもっぱら錢塘江以北の湖州市附近に集中しているという。

第二章第一節で述べるように越は前三七九年に会稽から呉へと遷都しているため、富盛や蕭山の窯址はもしかすると遷都にともない廃棄されたものかもしれないが、いずれにしても楚の侵攻とは無関係だろう。

- ⑰ 原始瓷器や印紋硬陶の出土地は比較的広範囲に広がっており、越地以外でも江蘇省や安徽省、河南省、はては湖北省の鄂東地区から出土することもある（楊楠二〇〇〇、丁蘭二〇一〇）。また、春秋時代のものは呉との関係も考えられる。

- ⑱ 淮安市博物館編二〇一一の八一頁に掲載された表一「運河村戦国墓出土器物登記表」には印紋硬陶が一つも記されておらず、かわりに一点しか出土していないはずの灰陶鉢が三点も記されている。運河村墓から出土した印紋硬陶はいずれも鉢であり、同表の「寸法」と「保存現状」から察するに、「灰陶鉢」と記されたもののうち上から一点目と三点目は印紋硬陶の鉢だろう。

- ⑲ 第二章注⑬に実例を挙げるように原始瓷器の生産は戦国末期には新たな形で再開されたが、印紋硬陶の生産はこのまま衰退していったように、牟永抗一九八一によると漢代には浙江省でも衰退していたという。

- ⑳ こうした視点は江東のみに限られたものではなく、彭適凡一九八七は楚の越地進出にともなう楚文化の流入が各地において印紋硬陶衰退の要因となったことを論じている。

- ㉑ 華塘墓でも仰身直肢が行われていたのか否かは、同墓の情報を載せる淮安市博物館編二〇一一が言及していないため、わからない。

- ㉒ 高莊墓には副葬されていた徐器は運河村墓からは出土していないが、徐が春秋末期に滅亡していることからすれば、それは阿墓の時代差によるものと判断するのが妥当である。

- ㉓ 王氏はこの青銅器群のなかには中原地区に流行していた豆・壺や楚文化圏で流行していた簠・敦が含まれておらず、副葬品の組合に規律がなさそうな点、多くが実用品である点、鼎の個数が楚墓のように偶数ではなく奇数である点などが越墓と同じだと述べている。

- ㉔ 高莊墓の報告書は、運河村墓出土の印紋硬陶は五点あり、高莊墓と同様に副葬品には越器が多かったと主張するが、印紋硬陶として掲載している写真は実際には紅陶罐のものであり（同報告書八八～八九頁、紅陶を間違えて印紋硬陶に数えてしまったようである）。

- ㉕ 図6掲載の写真には写りこんでいないが、いずれの杯にも把罐と同じ三つの乳足がある。

## 二 墓葬の変遷からみた楚の支配

運河村墓が高荘墓と習俗を同じくする、楚墓とは異質な墓であることは前章で述べたとおりだが、戦国後期になると淮安にも楚墓と同じ習俗や構造をもつ墓が出現しはじめる。高荘墓の報告書によると、同墓の近辺からは戦国後期の典型的な楚式陶礼器の副葬された竪穴土坑木槨墓が出土しているのだが、この墓は副葬品だけでなく構造も楚墓に通ずる点をもっており、楚墓のように傾斜した墓道や高大な封土、そして階段状の墓壁を備えていた。<sup>①</sup> 階段状の墓壁は図2-1にもあるように大・中型楚墓の特徴であり、運河村墓の報告書によると盱眙県黄花塘鎮徐墩から出土した戦国後期墓（以下、徐墩墓）の墓壁もまた階段状になっていたという。報告書は徐墩墓を戦国後期に比定される典型的な楚式木槨墓であるとし、棺槨の上に竹席が敷かれていたことや木俑が副葬されていたことも紹介しているが、槨蓋を竹席で覆うのが楚墓の特徴の一つであることは前章第一節で述べたとおりであり、人間にかわって木俑や玉俑といった人形が副葬されることもまた戦国中期以降の楚墓にみられる特色の一つである。<sup>②</sup>

これらの墓葬は盗掘被害がひどいため簡報が作成されていないが、そもそも淮安出土の戦国後期墓でこれまでに簡報ないし報告書が発表されているのは管見の限り金湖県の徐梁村戦国西漢墓（淮安市博物館ほか二〇一一。以下、徐梁村墓）のみである。徐梁村墓は一八基の小型墓からなる墓群であり、副葬品から一・二・一四号墓は戦国末期、一八号墓は前漢中期、のこりの一四基は戦国末期から前漢初期に比定されるが、規模が小さいこともあってか階段状の墓壁や人形の副葬といった大・中型楚墓の特徴はもっていない。ただし越器はいっさい出土しておらず、盗掘や破壊の痕跡がないことから、越器はもとから副葬されていなかったのだと考えられる。また、下葬年代が秦漢時代まで下らない一・二・一四号墓には、楚系の鼎・豆・杯・壺に加えて戦国後期楚墓に特徴的な盆や鈔が副葬されており、<sup>③</sup> それらの形態や組合は江東から出土する戦国後期楚墓の副葬品に非常によく似たものだった。

江東は淮南に比べれば文献資料がやや多く、楚の支配によって墓葬にどのような変化が起きたのかをある程度は把握しやすい地域である。後述のように越の滅亡については諸説あるものの、楚の江東支配が戦国後期になってから開始した点には異論がなく、実際に江東からは戦国後期に比定される典型的な楚墓も出土している。そしてそれらの副葬品には鼎・豆・杯・盒・鈇ないし壺といった組合がよくみられるのだが、徐梁村墓でも一号墓には陶鼎・豆・杯・盒・壺、二号墓には陶鼎・豆・杯・盒・鈇、一四号墓には鉄鼎・豆・盒・壺が副葬されていたように、戦国後期における江東と淮安の墓葬には通じるものがあったのである。

加えて江東からは、運河村墓のように在地の文化と外来の楚文化とが混在した墓も出土している。運河村墓の場合は淮夷、江東の場合は越の文化が在地の文化ということになるが、いま仮にこうした在地の文化と楚文化の双方の要素をもつ墓を混在型墓と呼んでおくと、江東でもそれを楚の支配が開始された後の墓とみるか、それともその前の墓とみるかで意見が分かれている。ただし江東は範囲が広いこともあって淮安ただ一都市よりは考古資料も多く、混在型墓の位置づけ、すなわち越が楚に敗れ、楚の支配を受けるようになったために造営された墓なのか、それともそれ以前からすでにつくられていた墓なのかという問題についても、淮安よりは確かな議論を行うことができる。

淮安は邗溝や海路で江東と結ばれており、運河村墓が越墓とよく似た構造をしていることからしてみても、江東とは古くから深い関わりをもっていた。そして戦国後期には双方からよく似た楚墓が出現しはじめるように、楚の支配によって生じた変化にも通じる点があったのである。そこで本章ではまず江東出土の戦国墓から楚の支配がどのように窺えるのかを論じ、それを援用することで、運河村墓の造営当時に淮安がどのような状況にあったのか、楚がどのようにして淮安に進出していったのか、その過程を明らかにしてみたい。

(一) 楚の江東支配と墓葬の変化

冒頭に挙げたBの記述は、楚の大攻勢により越王無彊が殺害されると越は諸勢力に分散して楚に服属したと述べるが、『史記』秦始皇本紀には、

D（二十五年）王翦遂に荆江南の地を定め、越君を降し、會稽郡を置く。

とあるように、始皇帝による統一直前まで越君が存在していたことが示されている。そのため越の滅亡については諸説が唱えられており、無彊の死をもって越は滅亡したとする者もいれば、その後も越は独立勢力として存在しつづけていたとする者もいる。

太田二〇一二ではこうした一見矛盾しあうかのような文献の記述を整理し、越は確かに無彊の死により正統な王統を途絶えさせるものの、その後もなお諸勢力に分散しながら江東に残存しつづけており、楚の江東進出は春申君が呉に封じられた前二四八年以降によく本格化したことを指摘した。その論拠の一つが、『統漢書』郡国志四の呉郡安県の条に附された劉昭注に、

越絶に曰く、西岑冢有り。越王孫開の立つる所なり。以て春申君に備え、其の子をして之を守らしむ。子死して遂に城中に葬らる、と。

とある『越絶書』の佚文である。これによれば春申君が呉に進出した際にもなおそれを警戒する越がいたのであり、無彊の死後に諸勢力に分裂した越は、あるものはBにいうように楚に服属したけれども、一方ではそれをよしとしない勢力もいたということになる。この他にも『越絶書』越絶外伝記呉地伝には春申君による呉地開発を伝える記述が数多くのことされているのだが、無論のこと『越絶書』の記述には『史記』と矛盾する点も多く、なかには伝説としかいえないものもある点には注意しなければならない。しかし春申君は『史記』貨殖列伝でも呉を栄えさせた人物として春秋・漢代それぞれ

の呉王である闔廬や劉濞と肩を並べており、たとえ『越絶書』の伝える彼の呉地開発が伝説を多分に含むものだったとしても、この場合はそうした伝説化がかえって春申君が呉にもたらした影響がいかに強いものであったのかを物語っているといえよう。

『史記』によると春申君は前二六二年に考烈王が即位すると同時に楚の宰相となり、前二三八年に考烈王が死去すると同時に殺害される。楚は前二四一年に現在の安徽省寿县にあった寿春に遷都するが、寿县に隣接する安徽省長豊県からは戦国後期に比定される楚墓が数多く出土しており、そのなかには墓道にあたかも衛士がいたかのように青銅戈や漆盾が並んでいるものがあつた（安徽省文物工作隊一九八二、安徽省文物考古研究所一九九四）。江蘇省蘇州市から出土した真山東周墓の一号墩一号墓（蘇州博物館一九九九。以下、真山墓）の墓道にも同様に青銅戈が並べられてあつたが、蘇州はすなわち春申君が封じられた呉であり、そこから戦国後期における楚の中心地と同じ珍しい習俗をもつた墓が出土したこと、加えてそこに宰相印と思しき銅印も副葬されていたことから、真山墓は春申君の墓ではないかとみられている。

同墓が本当に彼の墓なのかはさておき、江東からはこの他にも楚墓と同じ構造や副葬品をもつ墓が出土しており、とりわけ浙江省湖州市から出土した安吉五福楚墓は典型的な楚墓である（浙江省文物考古研究所ほか二〇〇七）。しかも五福楚墓には「史信」という印の捺された陶片が副葬されていたことから、簡報はこれを「楚が越を滅ぼした後に派遣した、まだ呉越文化に同化していない」楚の官吏の墓とみているのだが、安吉からは実際に同墓の被葬者も勤めていたと思しき古城址も出土しており、そこからは寿春で鑄造されたものとよく似た楚の金貨も発見された（董楚平一九九〇、程亦勝一九九五）。当地が太湖の東岸や杭州湾へと抜ける要所に位置していることからしてみても、安吉が楚の江東支配における重要な拠点の一つだったことは明らかである。

江東からはこうした真山墓や五福楚墓に代表されるような楚墓が出土する一方、前章第一節で挙げた鳳凰山墓のように、楚越双方の文化要素をもつ混在型墓も出土している。鳳凰山には三基の戦国墓があり、一九七五年に発掘された一・二号

墓の簡報はその下葬年代を戦国期とのみ報じたが（紹興県文物管理委員会一九七六）、越の滅亡を前四世紀末と考える高至喜一九九〇は、同墓を楚が越を滅ぼした直後に造営された楚墓とみて、戦国後期初頭に比定した。その一方で劉和恵一九九五は、同墓が楚文化の影響を強く受けていることを強調しつつも、副葬品の分析から同墓は戦国前期後段ないしは末ごろの越墓であると判断した。そして一九九七年に三号墓が発掘されると、簡報はこれを戦国中期前後の墓とし（紹興県文物保護管理所二〇〇二）、田正標二〇〇九もまた副葬品の分析から一・二・三号墓を纏めて戦国中期後段の越墓とした。

このように鳳凰山墓には楚墓説と越墓説の双方が唱えられているのだが、前者を主張する高氏は、江東では同墓のような混在型墓から越文化の影響が消失した結果、楚文化の要素しかもたない墓が出現するようになったと考えており、両者を継承関係に据えている。しかし五福楚墓の例からすれば、戦国後期に江東で造営された典型的な楚墓は、楚の江東支配が開始するにともない移住してきた楚人によって、新たにもたらされたものとみるべきである。つまり両者は継承関係にあるわけではないのであり、鳳凰山一・二号墓の棺が前章第一節で紹介した独木棺であることからしてみても、これを楚墓とする高氏の説には賛同できない<sup>⑤</sup>。

そもそもDの記述によると、秦は前二二二年に「荊江南地」を平定し、越君を降すと会稽郡を設置するが、「荊江南地」の平定と会稽郡の設置とが連動していることからすれば、この「荊江南地」とはまさに江東を指しているのだと考えられる<sup>⑥</sup>。そして江東平定後に越君が降伏しているということは、江東には秦の統一直前まで楚に同化することなく越として存在しつづけていた勢力がいたことである。彼らが楚に服属していたのか、それとも独立した状態にあったのかまでは不明だが、実際に銭塘江以南では楚が江東を支配するようになった戦国後期以降にもなお楚墓ではなく越墓が造営されつづけており<sup>⑦</sup>、江東に進出した楚が「盡く故吳地の浙江に至るまでを取」ったとBに記されていることからしてみても、楚の江東支配は銭塘江以北までにしか及んでおらず、それ以南は依然として越の地だったのである<sup>⑧</sup>。先行研究はいずれも江東における地域差を考慮せず、すべてをひとくくりにして論じているが、図1に明らかのように現在までに江東から発

見されている典型的な楚墓が錢塘江以北に偏っていることからしてみても、錢塘江以南と以北とで状況を分けて考えなければならぬことは明白である。

そして鳳凰山墓の出土した紹興はまさにこの錢塘江以南に位置しており、副葬品も錢塘江以南から出土する越墓との間に繼承關係をみいだすことができる。加えて紹興は越王翳が前三七九年に呉に遷都するまで越の都だった会稽のあった地であり、鳳凰山三号墓に副葬されていた玉矛には「不光」という越王の名が刻まれていた。<sup>⑩</sup>曹錦炎一九九五によれば「不光」というのはこの遷都を行った翳のことであり、その治世は前四一一年から前三七六年までのことだったと考えられる。<sup>⑪</sup>したがって三号墓の下葬年代は戦国前期末から中期前半が上限ということになるのだが、丁度その戦国前期から中期にかけての墓とされる高莊墓と鳳凰山墓の副葬品には三号墓に限らずいくつか類似点が指摘されており（王厚宇一九九一、鄭小畑二〇〇七、淮安市博物館編二〇〇九）、さらに二号墓には戦国後期には盒や鈔にとつてかわられる致も副葬されていた。<sup>⑫</sup>してみれば鳳凰山墓の下葬年代は戦国後期までは下らないとみるのが妥当であり、楚文化の影響を強く受けているとはいっても、楚の支配まで受けていたわけではなかったと考えられるのである。<sup>⑬</sup>

越は無疆の死により諸勢力に分散するが、その後すぐに楚が江東全域を支配するようになったわけではなく、越の最後の都だった呉には春申君が進出する段階になつてもなお楚と対立する越の勢力が存在していた。そして春申君によって楚の実効支配が開始された後も、旧都である紹興を中心とした錢塘江以南には依然として越が楚に同化しないまま存在しつづけていたのであり、それを反映するかのように、錢塘江以北では典型的な楚墓が造営されるようになっていく一方で、以南では継続して越墓がつくられていく。すなわち、江東では典型的な楚墓の出現こそが楚の支配が実効化したことを示しているのであり、混在型の墓をもつて楚の支配を窺うことはできないのである。

（二）楚による淮安支配の展開

本章冒頭で述べたように、淮安でも戦国後期には楚墓が造営され、特に徐梁村墓からは江東出土の楚墓とよく似た副葬品が出土している。してみれば江東同様に淮安もまた戦国後期には楚の実効支配を受けていたのであり、逆にいえばそれは、徐梁村墓らに先行する運河村墓の時代、すなわち支配者層の人間が楚墓とは異質な墓に埋葬されていた時点においては、楚の支配がどれほどの効力をもっていたのかは非常に疑わしいということになる。混在型墓である鳳凰山墓が楚の支配下で造営された墓ではないことからしてみても、運河村墓がいくら副葬品に楚文化の影響を強く受けているからといって、墓の構造や埋葬方法が在地の習俗を堅持している状態では、当時の淮安が楚に帰属していた証拠とまではならないのである。

そもそも運河村墓が楚国の墓とされた背景には、従来の領域認識、すなわち楚が前四世紀後半には淮南のほぼ全域、少なくとも邗溝以西は支配するようになっていたとする見方が大きく存在していた。<sup>④</sup> こうした従来の認識が推測に基づく不確かなものにすぎないことは本稿冒頭で説明したとおりだが、運河村墓が明らかに楚墓とは異質な墓であるにもかかわらず楚国の墓とされたように、この認識はすでに固定観念になってしまっているといつて過言ではない。では、そうした固定観念からくる先入観をとりはらってみると、運河村墓からはいったい何がみえてくるのだろうか。本稿でこれまで行ってきた議論をもとに、以下では各史料をいま一度みなおしてみることにしたい。

まず、はじめに述べたようにBの記述は威王期に楚が越を大敗させたことと懷王期に越王無彊を殺害したことを混同しているのだが、確かに楚越の緊張関係は威王期から懷王期にかけて長らくつづいてきたようで、『戦国策』楚策三では前三一八年頃にも楚が「東有越孽」、つまり東方に越という外憂を抱えていたことが語られている。そうした状況下で前三一九年に楚が広陵に築城したということは、そこに対越前線基地を設けた、ないしはもとからあった基地を強化したと

みるのが妥当であり、越が当時まだ淮北に勢力を残存させていたことを考慮してみても（太田二〇二二）、楚の広陵への築城は邗溝の長江側の入り口を封じることで江東と淮北とが容易に連絡できなくなることを目的の一つとしていたのではないかと考えられる。また前三二二年至るまで淮安ふくめ邗溝流域が楚の制御下に置かれていたことを窺わせる史料もいまのところみあたらないことから、Cにいう越の船団が淮安を通過して魏に行つたことを否定する根拠も何もないということになる。

ただし、楚にとって仇となる船団を通過させたからといって、当時の淮安は楚と敵対していたわけでもなかったのだろう。高莊墓や運河村墓に楚や越など各地の文化要素がいりまじっていたように、運河の要衝として古くから栄えてきた淮安は、政治的にもいづれか一つの勢力に肩入れするのではなく、対立しあう勢力の双方に通じていた可能性が高い。運河村墓が高莊墓より高位に位置づけられる墓であるにもかかわらず、青銅器の質や色、文様の精緻さは高莊墓のほうが明らかに優れており（淮安市博物館編二〇一一）、殉葬者の数も運河村墓は一人、高莊墓は一四人と高莊墓のほうが多いのは、長きにわたる楚越の対立のはざままで、淮安も疲弊していったことを示している。

このように高莊墓や運河村墓の時点ではまだ淮安で造営される墓には多様な文化が混在しており、そうした状況こそが水運の要に位置する淮安本来の状態だったのだが、楚の支配が開始し、楚人が移住してくると、淮安にも典型的な楚墓が造営されるようになっていく。それと同様に淮安から出土する戦国貨幣も齊・秦・楚・燕・魏・西周・東周と国籍が多様な一方で、その数量は圧倒的に楚の貨幣が多く、種類も爰金や布銭、蟻鼻銭と様々であった（尹増淮ほか一九九一）。それぞれの貨幣の始鑄や流通の時期については諸説あるものの、江村二〇一〇によると戦国中期に蟻鼻銭が江蘇地域に流通していた可能性は低く、そもそも蟻鼻銭が大量に流通するようになったのも戦国後期に楚が東遷して以降のことだという。淮安における楚の実効支配の開始時期を確定することは現在の史料状況では不可能だが、楚が東遷後、特に考烈王期に春申君の主導のもとで、失った国土を補填するかのよう飛躍的に東方へと領土を拡張していることからすれば（太田二〇

○九)、楚の淮安支配が実効化したのも東遷後、特に考烈王期以降だった可能性が高く、そしてそれは淮安の立地からして邗溝以東も同様だったとみるのが、現時点では妥当なところである。

- ① 墓壁が階段状になっていたことは王厚宇氏にご教示いただいた。
- ② 楚墓でも古くは人間が殉葬されていたが、戦国前中期には人形の副葬に変化していった(郭徳維一九九五、丁蘭二〇〇六)。
- ③ 戦国後期楚墓では敦にかわって盒や紡が流行した(高至喜一九九〇)。
- ④ 江東出土の戦国後期楚墓は劉和忠一九九五に纏められているが、その後も安吉魏塘村戦国墓(金翔二〇〇一)や上海福泉山戦国墓(周麗娟二〇〇三)、安吉五福楚墓(浙江省文物考古研究所ほか二〇〇七)、南京秦淮区宝塔頂一〇号院戦国墓(南京市博物館二〇〇九)などが出土している。
- ⑤ 鳳凰山三号墓では棺木が発見されなかったため棺の詳細は不明であり、椁内が被葬者を取る主室と副葬品を取る副室に分かれていた点は楚墓の椁に似ているといえなくはないのだが、高荘墓の椁にも副室があるため、この点をもって楚墓の証拠とすることも難しい。
- ⑥ 『史記正義』は「荆江南地」を「楚及江南地」とするが、『史記』は楚の滅亡を前二二四年ないし前二二三年のこととしており、このときすでに楚は滅亡している。
- ⑦ 例えば紹興の上虞鳳凰山戦国墓(浙江省文物考古研究所ほか一九九三)や上虞董村牛山戦国墓(王曉紅二〇一〇)、浙江省余姚市の老虎山一号墩(浙江省文物考古研究所二〇〇二)などがある。
- ⑧ ただし本章注⑩に挙げる半山戦国墓が錢塘江河口の北岸に位置するように、錢塘江近辺に限っては北岸であってもなお越の土地だったのかもしれない。
- ⑨ 越の遷都に関する議論については太田二〇二二を参照。
- ⑩ 呉王や越王の銘文をもつ青銅製の武器は湖北省や安徽省などの楚墓から発見されることが多いが、玉石製の場合は浙江省から出土するものが多く、儀仗ないしは明器だと考えられている(曹錦炎二〇〇二・二〇〇七、董珊二〇一四)。そのうち正式な考古発掘により得られたものはまだ少ないもの、杭州半山戦国墓の二四号墩一号墓からは「越王」の文字が刻まれた劍格が出土しており、洪麗姪二〇〇七・二〇〇八はこれを越の貴族墓群だとみている。簡報が未発表のため詳細は不明だが、徐穎二〇一三によれば同墓からは戦国から漢代にかけての器物が出土しており、沈忠煥二〇一三は多くの墓が戦国後期に比定されるのではないかと述べている。また、徐穎二〇一三は同墓出土の玉器をもとに越の用玉制度について考察しており、鳳凰山三号墓を越の貴族墓として扱っている。
- ⑪ 楊寛二〇〇一や董珊二〇一四のように、呉に遷都した年代ふくめ、賢の治世をこれより一年遅らせる論者もいる。
- ⑫ 本章注③参照。
- ⑬ ちなみに本章注⑦に挙げた老虎山一号墩の一〇号墓と一四号墓は夫婦墓とみられており、夫の墓とされる一〇号墓は戦国末期から前漢初期に比定される越文化の要素が強い墓である一方、妻の墓とされる一四号墓は戦国末期に比定される楚文化の要素が強い墓だった。しかも一四号墓には彩色の陶鼎や鼎・壺・盒・鈔といった江東出土の戦国後期楚墓によく見られる副葬品に加えて、従来にない器形をした原始瓷器の壺や甗も副葬されていたのだが、真山墓の被葬者の息子の墓とされる真山東周墓の三号墩一号墓(蘇州博物館一九九九)や上海市出土の戦国後期楚墓である外岡古墓(黄宣佩一九五九)からも同様の原始

瓷器が出土しており、楚の江東支配が開始した後に楚文化と越文化がまた新たな形で融合していった様子が窺える。

⑭ 運河村墓の報告書は毛穎・張敏二〇〇五に依拠して従来の領域認識を説明しているが、張敏氏は同墓の発掘を監督した人物でもある。

## おわりに

以上、本稿では運河村墓が楚国の墓ではないことを立証し、従来の領域認識が確証をもたない単なる推測にすぎないことを明らかにした。そして、従来の認識に縛られることなく、先入観をもたずに史料を読みとけば、前三二二年の段階では淮安に楚の支配は及んでおらず、邗溝もまだ楚の制御下には入っていないかったということになる。太田二〇〇九では、前三二二年の時点で楚は下蔡・居巢・樅陽までしか東方に安定した支配を確立できていなかったとしたが、本稿の議論はそれと何ら矛盾しておらず、やはり楚が戦国中期にはすでに淮河や長江の下流域にまで支配を拡げていたとする従来の認識は改めなければならないのである。

はじめに述べたように、従来はこの認識のために春秋戦国の楚と秦末漢初の楚との差異に注意が向けられることはなかったが、本稿で明らかにしたように、淮河や長江の下流域に楚の実効支配が及んだのは戦国後期以降のことだった。そして太田二〇〇九で指摘したように、秦末に陳渉に呼応して楚地から蜂起した諸勢力のうち、史書に名をのこしたものはいずれも下蔡・居巢・樅陽以東の地域から挙兵しているのである。楚の拠点が江漢地区から江淮地区へと移ったのは、前二七八年に秦の侵攻によって江漢地区を追いだされ江淮地区へと東遷したからであり、それからわずか五〇年余りにして楚が減んでいることからしてみても、江漢地区に栄えた春秋戦国の楚と、江淮地区に興った秦末漢初の楚とが、一線を画すべき存在だったことは明白である。そして、両者を結ぶ存在として東遷後の楚が重要なことはいまでもないことであり、戦国から秦へと繋がる楚の歴史的連続性を解明するためには、東遷によって春秋戦国の楚にどのような変化が起きたのか、そしてそれがどう作用した結果に秦末漢初の楚が生まれたのか、ということをまず明らかにしなければならない。

それについては別稿の課題とすることにして、本稿では最後に、『後漢書』東夷列伝の、秦六國を并わせ、其の淮・泗の夷は皆散じて民戸と爲る。

という記述について考えておきたい。これによると、淮河・泗水流域に住まう夷は秦の統一によってようやく解体されたことになるが、してみると淮安の人々は戦国後期には楚の支配を受けるようになっていたとはいえ、それによりすぐに「楚人」になってしまったわけではなかったのである<sup>①</sup>。

本稿冒頭で述べたように淮安は韓信の故郷であり、高莊墓の東北約1kmの地点には彼の母の墓と伝えられる韓母墓もある。これが本場に『史記』淮陰侯列伝に記された司馬遷もみたという彼女の墓なのかどうかは不明だが、その封土には楚墓の特徴の一つである灰白土層があり、湖北省から出土する楚墓に非常によく似ているという（淮安市博物館編二〇〇九）。

『史記』や『漢書』には韓信が楚の風俗に慣れ親しんでいることを理由に楚王に選ばれたことが記されているが、それに象徴されるように秦末漢初にはすでに淮安には楚の風俗・文化が広まっていた。しかしその一方で韓信が「楚人」あるいは「楚の出身」とはいわれずに「楚の風俗に慣れ親しんでいる」といわれているところに、楚や越の文化を摂取しつつもなお古来の習俗を守りつづけた、高莊墓や運河村墓を築きあげた人々の余韻が、まだ彼のなかにのこっているように思えるのである。

太田二〇〇九・二〇一二でも論じてきたように、陳渉や項羽、劉邦らに代表される秦末に楚地から蜂起した反乱集団は、楚の旗印のもとに集結しながらも、実際にはもともと楚人ではなかった人々を少なからず内包していた。では、なぜ「楚」が彼らを纏めあげる紐帯となりえたのか。この問題について考えるとき、韓信が「楚の風俗に慣れ親しんでいる」といわれていることは非常に示唆的である。楚文化が漢代の文化にも極めて重大な影響を与えたことは李学勤一九八一がすでに指摘しており、氏はその要因を秦末の群雄や漢建国の君臣達が多く「楚人」だったことに求めているが、正確には彼らは「楚人」ではなく「楚文化の担い手」だったというべきである。韓信のみならず、純粋な楚人とはいいがたい劉邦

自身の言動にもしばしば現れるように、彼らは出自を異にしながらもみな一様に楚の文化に慣れ親しみ、それを好んでいた人々だった<sup>③</sup>。してみれば、出自の異なる彼らが「楚」の旗印のもとに結集した大きな要因として、楚文化、ないしは楚文化を淵源にもつ文化の共有が指摘できるだろう。

漢帝国の成立はこれまで制度的な面から論じられるばかりだったが、出土資料が増加したいま、古代帝国誕生の背景にある、人々を結びつける紐帯としての文化に着目することも必要である。漢という、既存の貴種性や伝統をもたない国家がこの時点で初めて中国に誕生しえた背景には、春秋時代から始まる楚文化圏の拡大が不可欠な要素だったのではないか。その論証は、今後の課題とすることにした。

① 楚は考烈王期に淮北で越を併合しているが、劉邦集団には形成初期の段階から淮北で荦兵した越が参加しており、太田二〇一二で指摘したように両者には何らかの関係性があったと考えられる。このことからしてみても『後漢書』東夷列伝のこの記述には信憑性があるといえよう。

② 『史記』高祖本紀「皇帝曰、義帝無後。齊王韓信習楚風俗、徒爲楚王、都下邳。」

『漢書』高帝記「下令曰、楚地已定、義帝亡後、欲存恤楚眾、以定其主。齊王信習楚風俗、更立爲楚王、王淮北、都下邳。」

③ 例えば四面楚歌の故事はいうまでもなく、劉邦自身も『史記』留侯世家に「戚夫人泣、上曰、爲我楚舞、吾爲若楚歌」とあるように楚舞・楚歌を嗜んでいた。彼らが楚の文化に慣れ親しんでいた事例は文献中に散見するが、それに加えて文献には彼らが卮という酒杯をよく使っていたことが記されている。卮は戦国後期秦墓からも出土するが、戦国後期楚墓からもよく出土しており、浅原二〇〇五は卮の原型が戦国中期までの楚墓に求められること、また卮と劉邦らの関係について

指摘している。

#### 引用文献

（日本語）五十音順

浅原達郎 二〇〇五「卮について」『日古』第四号。

江村治樹 二〇一〇「中国における古代青銅貨幣の生成と展開（六）

——楚貝貨の性格——」『名古屋大学文学部研究論集 史学』五六。

太田麻衣子 二〇〇九「鄂君啓節からみた楚の東漸」『東洋史研究』第六八巻第二号。

太田麻衣子 二〇一二「越の淮北進出とその滅亡——劉邦集団Ⅱ楚

人」説再検討のために——」『古代文化』第六四巻第二号。

佐藤武敏 一九八五「戦国時代楚の漆器」林巳奈夫編『戦国時代出土文

物の研究』同朋舎。

関口広次 一九八五「いわゆる「原始青瓷」の発生をめぐって」三上次

男博士喜寿記念論文編集委員会編『三上次男博士喜寿記念論文集

陶磁編』平凡社。

- 問瀨収芳 一九八四「秦帝国形成過程の一考察——四川省青川戦国墓の検討による——」『史林』第六七巻第一号。
- 問瀨収芳 一九八六「戦国時代楚文化の中の鼎と敦——周辺文化との関連を主眼にみる——」『古史春秋』第三号。
- 吉木道雅 二〇一〇「後漢書東夷列伝序疏証」『中国古代史論叢』第七集。
- （中国語）拼音順
- 安徽省文物工作队 一九八二「安徽長豊楊公発掘九座戦国墓」『考古学集刊』第二期、中国社会科学出版社。
- 安徽省文物考古研究所 一九九四「安徽長豊戦国晚期楚墓」『考古』第二期。
- 曹錦炎 一九九五「越王嗣旨不光劍銘文考」『文物』第八期（同二〇〇七に再録）。
- 曹錦炎 二〇〇二「新出鳥虫書越王兵器考」『古文字研究』第二十四輯。
- 曹錦炎 二〇〇七「越王不光矛跋」『呉越歴史与考古論叢』文物出版社。
- 陳偉 一九九二「楚・東周・地理研究」武漢大学出版社。
- 陳元甫 二〇〇九「越国貴族墓葬制葬俗初步研究」『浙江省文物考古研究所編』『紀念浙江省文物考古研究所成立三十周年論文集』（『浙江省文物考古研究所學刊』第九輯）科学出版社（『東南文化』二〇一〇年第一期に再録）。
- 程亦勝 一九九五「浙江安吉古城発見楚金幣」『考古』第十期。
- 丁蘭 二〇〇六「湖北地区楚墓分区研究」民族出版社。
- 丁蘭 二〇一〇「鄂東楚墓出土原始瓷和印紋硬陶器現象与民族文化融合」『中南民族大学学报（人文社会科学版）』第三十巻第四期。
- 董楚平 一九八八「呉越文化新探」浙江人民出版社。
- 董楚平 一九九〇「楚越過程攻略」同『百越民族研究』江西教育出版社。
- 董珊 二〇一四「呉越題銘研究」科学出版社。
- 高至喜 一九九〇「論戦国晚期楚墓」『東南文化』第四期。
- 谷建祥・尹增淮 一九八八「江蘇沭陽万北遗址試掘の初步収穫」『東南文化』第二期。
- 郭德維 一九九五「楚系墓葬研究」湖北教育出版社。
- 何浩 一九八九「楚滅国研究」武漢出版社。
- 洪麗婭 二〇〇七「杭州半山戦国墓出土玉石器材質研究」『東方博物館』第二十四輯。
- 洪麗婭 二〇〇八「越国玉石器及早期昌化石文物研究」『東方博物館』第二十九輯。
- 湖北省博物館編 一九八九「曾侯乙墓」文物出版社。
- 湖北省荆州区博物館 一九八二「江陵天星觀一号楚墓」『考古学報』第一期。
- 湖北省荆州区博物館 一九八四「江陵雨台山楚墓」文物出版社。
- 淮南市博物館 二〇〇九「江蘇淮南市運河村一号戦国墓」『考古』第一期。
- 〇期。
- 淮南市博物館・金湖県図書館 二〇一一「淮安金湖徐梁村戦国西漢墓葬群発掘簡報」『東南文化』第三期。
- 淮南市博物館編 二〇〇九「淮陰高莊戦国墓」文物出版社。
- 淮南市博物館編 二〇一一「淮安運河村戦国墓」文物出版社。
- 淮陰市博物館 一九八八「淮陰高莊戦国墓」『考古学報』第二期。
- 黄宣佩 一九五九「上海市嘉定区外岡古墓清理」『考古』第二期。
- 黄宣佩・孫維昌 一九八一「上海地区幾何印紋陶遺存の分期」文物編輯委員会編『文物集刊』三、文物出版社。
- 金翔 二〇〇一「浙江安吉県壘壩村発現一座戦国楚墓」『考古』第七期。
- 孔令遠・陳永清 二〇〇二「江蘇邳州市九女墩三号墩の発掘」『考古』

第五期。

李學勤 一九八一「新出簡帛與楚文化」湖北省社會科學院歷史研究所編《楚文化新探》湖北人民出版社。

劉和惠 一九九五「楚文化的東漸」湖北教育出版社。

劉侃 二〇〇九「紹興西施山遺址出土文物研究」《東方博物》第三十一輯。

劉延常·高本同·郝導華 二〇〇七「山東地區楚文化因素分析」楚文化研究會編《楚文化研究論集》第七集，岳麓書社。

毛穎·張敏 二〇〇五「長江下游的徐舒與吳越」湖北教育出版社。

孟國平 二〇〇九「試論商周時期浙江地區的原始瓷器」浙江省文物考古研究所編《紀念浙江省文物考古研究所成立三十周年論文集》（浙江

省文物考古研究所學刊）第九輯，科學出版社。

牟永抗 一九八一「浙江的印紋陶——試談印紋陶的特徵以及與瓷器的關係」文物編輯委員會編《文物集刊》三，文物出版社。

南京博物院·徐州市文化局·邳州市博物館 一九九九「江蘇邳州市九女墩二號墩發掘簡報」《考古》第一期。

南京市博物館 二〇〇九「南京秦淮區宝塔頂一〇號院戰國墓發掘簡報」《東南文化》第四期。

彭適凡 一九八七「中國南方古代印紋陶」文物出版社。

紹興鼎文化發展中心·越國文化博物館編 二〇一二「紹興出土商周印紋硬陶與原始瓷」西泠印社。

紹興鼎文物保護管理所 二〇〇二「浙江紹興鳳凰山戰國木槨墓」《文物》第二期。

紹興鼎文物管理委員會 一九七六「紹興鳳凰山木槨墓」《考古》第六期。

蘇秉琦 一九八二「從楚文化探索中提出的問題」《江漢考古》第一期

（同）蘇秉琦考古學論述選集（文物出版社，一九八四年）再錄。蘇州博物館 一九九九「真山東周墓地 吳楚貴族墓地的發掘與研究」文

物出版社。

田正標 二〇〇九「江、浙、滬地區戰國墓分期初探」浙江省文物考古研究所編《紀念浙江省文物考古研究所成立三十周年論文集》（浙江省文物考古研究所學刊）第九輯，科學出版社。

王厚宇 一九九一「試談淮陰高莊墓的時代、國別、族屬」《考古》第八期（淮安市博物館編二〇〇九）再錄。

王曉紅 二〇一〇「上虞董村牛山戰國墓清理」《東方博物》第三期。

王屹峰 二〇一〇「中國南方原始瓷窯業研究」中國書店。

沈志嶼 二〇一三「杭州市半山出土戰國原始瓷研究」《福建文博》第三期。

徐穎 二〇一三「從杭州半山出土玉石器管窺越國貴族用玉等級」《杭州文博》第一期。

徐州博物館·邳州博物館 二〇〇三「江蘇邳州市九女墩春秋墓發掘簡報」《考古》第九期。

楊寬 一九四六「楚懷王滅越設郡江東考」上海《益世報》副刊《史苑》周刊第四期。

楊寬 一九九一「關於越國滅亡年代的再商討」《江漢論壇》一九九一年第五期。

（右二論文是同）楊寬《古史論文選集》（上海人民出版社，二〇〇三年）再錄。

楊寬 二〇〇一「戰國史料編年輯証」上海人民出版社。

楊楠 二〇〇〇「論商周時期原始瓷器的區域特徵」《文物》第三期。

楊權喜 一九八七「江漢地區楚式高的初步分析」《楚文化研究論集》第一集，荊楚書社。

楊權喜 二〇〇一「江漢地區的高與楚式高」《江漢考古》第一期。

尹增淮·包立山·王劍 一九九一「建國以來淮陰出土的先秦貨幣」《東南文化》第六期。

浙江省文物管理委员会 一九五七「紹興漓渚的漢墓」『考古學報』第一期。

浙江省文物考古研究所 二〇〇二「余姚老虎山一号墩発掘」『滬杭甬高速公路考古報告』文物出版社。

浙江省文物考古研究所・安吉県博物館 二〇〇七「浙江安吉五福楚墓」『文物』第七期。

浙江省文物考古研究所・上虞県文物管理所 一九九三「浙江上虞鳳凰山古墓葬發掘簡報」『浙江省文物考古研究所學刊』建所十周年紀念(一九八〇—一九九〇) 科学出版社。

浙江省文物考古研究所・紹興県文物保護管理所編 二〇〇二『印山越王陵』文物出版社。

浙江省文物考古研究所編 二〇〇九『浙江越墓』科学出版社。

鄭小炉 二〇〇七「江蘇淮陰高莊大墓的族属与年代探討」『吳越和百越地区周代青銅器研究』科学出版社(淮安市博物館編二〇〇九に再録)。

中国考古学会編 一九八九『中国考古学年鑑』文物出版社。  
周麗娟 二〇〇三「上海青浦福泉山發現一座戰國墓」『考古』第二期。

挿図出典

図1 譚其驥主編『中国歴史地圖集』第一冊(中国地圖出版社、一九八二年)をもとに筆者作図。

図2-1 湖北省荊州地区博物館一九八二「図二を再トレースおよび一部改変。

図2-2 淮安市博物館編二〇一〇「附五」2を再トレースおよび一部改変。

改変。

図2-3 浙江省文物考古研究所ほか二〇〇二「図四を再トレースおよび一部改変。

図3-1 淮安市博物館編二〇一〇「図五」を転載。

図3-2 淮安市博物館編二〇一〇「図五」を転載。

図3-3 淮安市博物館編二〇一〇「図四三」を転載。

図4-1-3 湖北省荊州地区博物館一九八二「図一」1-2を再トレース。

図4-2 淮安市博物館編二〇一〇「附五」12を再トレースおよび一部改変。

図5 淮安市博物館編二〇〇九「淮陰高莊戰國墓」図七を転載。

図6-1 淮安市博物館編二〇一〇「図四四」を転載。

図6-2 劉侃二〇〇九「図四十二」を転載。

図6-3 紹興県文化發展中心ほか二〇一〇「四四頁」より転載。

〔附記〕

本稿は平成二六年度科学研究費補助金「江淮地区楚文化の研究」漢帝國成立の文化的背景」による研究成果の一部である。淮安市博物館での調査では副館長の陳永賢氏・研究館員の王厚宇氏、復旦大学の李曉傑氏・魏毅氏に大変お世話になった。また本稿の一部は中国考古学研究会京都例会および「中国古鏡の研究」会にて口頭発表したことがあり、多くの方々からご教示を賜った。ここに深く感謝の意を申し上げます。

(国士館大学文学部講師)

The Eastern Shift of Chu as Seen from the Birthplace of Han Xin:  
Examining the Warring States-Period Tomb Yunhecun-1  
in Huai'an in Jiangsu

by

OTA Maiko

Huai'an, located at the mouth of the Hangou Canal on the Huaihe River in Jiangsu province, is the birthplace of Han Xin, a leading minister of Liu Bang, the founder of the Han dynasty known as Gaozu. According to the report on the Yunhecun-1 Warring States-Period Tomb excavated in 2004, the tomb has been judged a tomb from Chu state that was built near the shift from the mid to the late Warring States period and it is evidence that Chu had spread its control to basin of the Hangou Canal by the end of the fourth century BCE. In the conventional understanding of the extent of Chu's control, which was based on written sources, it was thought that the basin of the Hangou Canal had been incorporated into Chu territory by the mid Warring States period, and the report on the Yunhecun-1 Warring States-Period Tomb has been used to confirm the conventional understanding on the basis of archaeological evidence. Nevertheless, there are many problems concerning the report's argument that the tomb was a Chu tomb; whether it can actually be called a Chu tomb and whether the tomb can really be taken as evidence proving the conventional understanding of the extent Chu territory is extremely dubious. Moreover, as the conventional understanding of the extent of Chu territory itself was based on fragmentary written sources and was merely speculative, it is doubtful whether the Chu truly expanded its territory to the Hangou Canal basin during the mid Warring States period.

Then in this paper, I examine each of the arguments in the report of the Yunhecun tomb one by one and prove that this tomb exhibits characteristics of the older customs of Huai'an that are at odds with those of Chu tombs and thus it cannot be called a tomb of the Chu state. Next, tracing the changes in the Warring State-era tombs from excavations in Jiangdong, the southern part of Jiangsu and the northern portion of Zhejiang, Shanghai in the

southern downstream basin of the Changjiang River and the lower basin of the Qiantangjiang River that permit us to reconstruct to a certain extent the process of the actual implementation of Chu rule, which can also be seen in written sources, I clarify what sorts of changes in the tombs in the region that came about with the beginnings of actual Chu rule. In regard to the Huai'an during the Warring States period, nothing can be learned with certainty from written sources, but through a comparison of the changes in tombs in Huai'an and those in Jiangdong, I demonstrate that the spread of Chu's actual rule to Huai'an occurred following the final stage of the Warring States period as it also did in Jiangdong.

In short, the conventional understanding of the expansion of the territory of Chu into the Hangou Canal basin by the mid Warring States period is mistaken, and the expansion of actual Chu rule into the lower basins of the Huaihe River and the Changjiang River took place after the final stage of the Warring States period had begun. Therefore, we understand that the Chu that flourished in the Jiangnan region in the Spring and Autumn and Warring States periods and the "Chu" that rose in Jianghuai region at the close of the Qin and early Han periods cannot simply be viewed as identical. Among the "Chu" forces that arose in the Jianghuai region in the late Qin were people who had only accepted Chu rule in the last stage of the Warring States period, in other words, there were many who had accepted Chu rule for a brief period. It is extremely suggestive that Han Xin is not called "a Chu person" or "a person from Chu" in the *Shiji* or the *Hanshu*, but he is instead called one who was "very familiar with the culture of Chu." It can be said that one reason that such men who were definitely not originally from Chu assembled under its banner was a shared Chu culture. The formation of the Han Empire has been argued solely from the point of the political system, but with now with the addition of excavated sources, it is possible to focus on the fact that there was a shared culture that linked people who were behind the birth of the ancient empire. It will be necessary to consider in the future the role played by Chu culture in the formation of the Han dynasty.